

東日本大震災 関連情報（第15報）

平成23年5月26日
全国老人クラブ連合会

●東日本大震災に関する、老人クラブ関連の情報をお伝えします

1. 福島県被災地訪問報告

全老連では、福島サポート班幹事県である新潟県老連、東京都老連とともに福島県老連を訪問、打合せの後、被災地を訪問しました。別添により報告します。

2. 宮城県・仙台市被災地訪問報告

同じく、宮城サポート班幹事県である山形県老連とともに宮城県・仙台市各老連と打合せの後、被災地を訪問しました。別添により報告します。

●支援活動

1. 元気袋情報

京都府老連から京都新聞に掲載された、元気袋作成に関する記事が届きましたので添付いたします。「老人クラブ会員でよかった」という言葉が掲載されています。

2. 救援拠金情報

大分県老連より報告がありました。

◇ 竹ゴマ・竹トンボ提供で、街頭募金活動 [大分県大分市 香楠クラブ(会員109名)]

クラブの渡邊会長は、豊後竹ゴマ保存会の会長です。このたび友人会員から竹ゴマ等1000個の提供をうけて、寄付された方に提供する方法で、街頭募金活動を行うことを思い立ちました。大型商業施設の協力を得て、人通りの多いフェスタ広場において、ゴールデンウィーク最終日の5月8日午前10時から午後3時頃まで、会員3名で募金活動を行い、多くの子どもたちや高齢者の皆さまがご協力くださいました。



福島県現地打合せ会、被災地訪問について（報告）

福島県老連との現地打合せ会に、サポート班幹事県である新潟県・東京都老連とともに参加した後、被災地を視察した。その状況について、次のとおり報告する。

1. 期 日 平成23年5月16日

2. 参加者 新潟県 高橋事務局長、東京都 秋山事務局長
全老連 齊藤事務局長、河野参事

3. 福島県現地打合せ会

- ・ 10時30分から県老連事務局のある県総合社会福祉センター第3研修室にて、被災地老連からの報告・説明、全老連からの震災対応、福島県サポート体制について報告を行った。

<現地参加者>

福島県老連 渡部副会長（下郷町）、三浦副会長（福島市）、永山会長（檜葉町）、
渡辺福島市女性部長、本田福島市老連事務局長
渡邊事務局長、齋藤事務局次長、北村主査

○挨拶

- ・初めに全老連齊藤局長より挨拶、災害のお見舞いと本会議の趣旨について伝えた。
- ・続いて、県老連渡部副会長より、小室会長が体調不良で急きょ欠席となった旨報告があり、今回の地震、津波、放射能被害を受けた被災県として、全国の支援に対すお礼が述べられた。

○応援メッセージ寄贈

- ・サポート県幹事の紹介の後、新潟県老連高橋事務局長より持参していたサポート県及び関東ブロックからの応援メッセージ（21通）が渡辺副会長に手渡された。

○被災地報告

- ・福島県内の被災状況について渡邊事務局長から報告があり、次いで檜葉町老連永山会長より報告を受けた。
- ・永山会長（檜葉町）
檜葉町は第一原発から半径20キロ内の警戒区域にあり、住民はそれぞれ避難中。（町は第二原発を抱えている）
- ・会長は現在福島市内の娘の家に避難中。地震当日は避難指示を受け車で娘宅に向った。いつもなら2時間で行くところ周辺町村からの避難の車で渋滞していて9時間かかって夜中に着いた。
- ・その後会員の消息を調べたが、平均で5回、多い人で7回も避難所を移っているのになかなか所在がつかめなかったが、2ヶ月が経過しようやく会員の所在がつかめてきた。

- ・町役場は会津三里町に設立された。老連を担当している社協職員はボランティア担当となった。
- ・知り合いが、南会津の温泉宿に避難しているので行ってみた。行く前は「三食温泉付きで良い暮らしだな」と思っていたが、営業の邪魔にならないようにさまざまな点に制約があり、避難者はひっそりと暮らしているという感じで気の毒に感じた。
- ・余震は1年くらい続くと言われている。何年後に帰れるのかわからない。3年先、5年先に戻ったとき組織がどうなっているのか心配だが、リーダー育成に取り組みたいと考えている。

○今後の取り組み

- ・県老連では、「やさしさ地域友愛ネットワーク事業」や「地域子育て創生事業～避難所におけるの寺子屋」（6月／避難所5か所で開催）を通じて、友愛活動の推進と避難所における被災者の支援に取り組む予定。
- ・また、来月開催する女性リーダーセミナーで県内における支え合いを呼びかける。

4. 現地訪問

- ・スケジュール

県老連（福島市発）⇒ ①新地町（新地町福祉センター他）⇒ ②相馬市 ⇒
③相馬港⇒ 県老連

- ・津波は、新地町に向う国道6号線が防波堤となって止まった。その為、津波にさらわれた海側とこれまでどおりの山側では全く景色が異なっていた。住宅街、農村においては地形の関係で被災を受けた家と免れた家が隣接し、海辺の町では大きな船が何隻も道に乗り上げ、不思議な感じがした。海水に浸かった田んぼは塩田のように一面に塩を吹き白く覆われていた。
- ・トイレを借りて訪ねた福祉センターは避難所になっており、小さなホールに多い時には100人以上いたということだが、現在は20人未満であった。責任者に「元気袋」の説明をし避難者の方へ渡してもらうようことづけた。
- ・さらにセンターの方から、町社協が仮住まいをしていると紹介され訪問。担当者は不在であったが、事務局長に話しを聞くことができた。
- ・事務局長は自宅が海に近い方にあり、土台を残してすべて流されたとのこと。災害後、ボランティアセンターの業務に忙殺され、自宅には地震の後2度しか行っていないとのことであった。

【感想】

- ・被災者があちこちの避難所を転々とする中、多くのリーダーが会員の消息を求めて連絡を取り続けていたことに、リーダーの責任感の強さを感じた。避難所の平均移動回数が5回という中、作業はどんなに大変であっただろう。
- ・永山会長は、避難先でひっそりと暮らしている仲間の姿に心を痛めたという。避難所内での老人クラブ活動や地域の老人クラブに参加するなど、今いるところで同世代の

仲間と語り合う場やからだを動かす機会を作ること、老人クラブの目的である「仲間づくりを通じた生きがいと健康づくり」に取り組むことが求められていると感じた。

- ・ 県老連は、今後行うブロック別会議で「元気袋」について紹介し、被災されたリーダーや支援を検討している市町村老連に活用してもらうように呼びかけることに決定。これからも被災地と県内、全国のクラブがつながっていけるように、被災された会員やリーダーの声、各地で取り組まれている支え合い活動の情報発信に努めたい。



福島県老連出席者のみなさん

渡部副会長「頑張ろう福島県老人クラブ」（左から2人目）

檜葉町老連永山会長「お互いがんばりましょう」（右から2人目）



新地町



相馬市
陸に流されてきた船



●避難所に貼られていたポスター
「どこにいたって、
新地が好きです。」
各地の避難所などに配布し、離れ離れになった住民に向けた励ましのメッセージを送っている。

宮城県現地打合せ会、被災地訪問について（報告）

宮城県・仙台市各老連との現地打合せ会に、サポート班幹事県である山形県老連とともに参加した後、被災地を訪問した。その状況について、次のとおり報告する。

1. 期 日 平成23年5月18日

2. 参加者 山形県 高橋事務局長、横戸事務局職員
全老連 齊藤事務局長、谷野参事

3. 宮城県現地打合せ会

- ・ 10時30分から県社会福祉会館会議室にて、被災地老連からの報告・説明、全老連からの震災対応報告、宮城サポート班幹事からの説明による打合せを行った。

○現地参加者

宮城県老連 坂本会長（加美町）、三塚副会長（登米市）、遠藤副会長（石巻市）
鈴木事務局長、兵藤主任、高橋主事

仙台市老連 橋本会長（青葉区）本郷副会長（宮城野区）、佐藤副会長（若林区）
上野副会長・女性委員長（青葉区）
梶原常務理事・事務局長、佐藤次長、高阪主任

- ・ 冒頭、地元の会長から次の通り挨拶があった。

橋本仙台市会長「自宅が全壊したが、老人クラブや地域の人々の応援を得たことは生涯忘れない。老人クラブの仲間は大事。また地域のつながりの大切さを感じている。いただいた元気袋は避難所に届けて喜んでもらい、かえって元気づけられた。」

坂本宮城県会長「昨日の役員会で“老人クラブが力を出し合って、めげずにがんばりましょう”と誓い合った。亡くなられた方の2/3は高齢者で弱者であることを実感しているが、会員は減らしたくない」

- ・ 宮城県内、仙台市内の被災状況について各事務局長から報告があり、その後、津波による大きな被害をうけた、佐藤 仙台市副会長（若林区）、遠藤 宮城県副会長（石巻市）から報告があった。

佐藤 仙台市副会長（若林区）

「地震発生から14日目、自転車で被害がひどい海岸地域へ行ってみた。少し高くなっている東部道路から先は何もない。海岸そばの地区老連会長の自宅は土台だけが残り、松林も少しの松が残るのみだった。ここは七郷地区と六郷地区に分かれている。七郷地区は4つのクラブが解散して1つのみ残り、六郷地区でも2つのクラブが解散、他は名前だけでも維持したいという熱意があるが、皆バラバラに避難所にいる状況である。10名でもとにかく会合をもとうと頼んでいる。」

遠藤 宮城県副会長（石巻市）

「地震当日は、市老連の活動を終了して事務所にいた。“机にもぐれ”と声をだした後に本棚が倒れた。それぞれ帰ったが、1名は途中で野宿したという。その後ガソリンが手に入らなかったが、なんとか被害のひどい地域に行きたいと思い、自衛隊に事情を話すと道路の状況を調べてくれた。行って見て唖然とした。道路は歩けるようになっていたが、鉄橋は寸断されて500mも川上へ。いるのは自分一人で気味が変わる感じだった。ビデオカメラを撮った。“このガレキの下に老人クラブがあった。どうしたら立ち上がれるか”という思いだった。市内7支部のうち4支部が壊滅状態。市老連事務局は社協で現在手一杯のため、社協の了解を得て、とにかく一度皆に集まってもらいたいと考えている。」

4. 現地訪問

- ・ スケジュール

仙台発⇒ ①仙台市若林区（東部道路～荒浜）⇒ ②七ヶ浜町（町中～海岸）⇒ ③塩釜市（港）⇒仙台着

【① 仙台市若林区の概況】

- ・ 仙台市老連 橋本会長、本郷副会長、佐藤副会長（若林区）、梶原事務局長の先導により若林区を訪ねた。
- ・ 東部道路を超えると景色が一変する。走る道路はほとんどきれいに片付いているが、一面のガレキ、建物の残骸、流木・・・。海岸沿いの“荒浜”で車を降りる。佐藤副会長の話された、地区老連会長自宅の土台、少しの松が目の前だった。
- ・ ガレキは寄せられていて、佐藤会長によると「ずいぶん片付いた」が、道はまだ関係車両が行き交うのみ。この広い土地をどうするのか。
- ・ 堤防をこえて歩いて海にでると、また景色が一変。きれいな砂浜が広がっていた。

【②七ヶ浜町】

- ・ 地震前にこの町の会員から月刊『全老連』に投稿があった縁で知っていた、中野秀次郎 町老連会長に連絡をとり、町の中心部で出迎えてくれた。
- ・ 町は仙台まで車で30分程度で通勤圏になっている。三方を海に囲まれ、アップダウンの激しい土地である。中野会長のご自宅は高台のために被害はなかったという。
- ・ 会長に案内してもらって海に向かう。小さな入り江がいくつも重なっていて、土地の低いところは軒並み津波被害を受けている。しかし少し高くなっているところは無事で、狭い地域でも被害の差が大きい。
- ・ こども砂浜で、実に風光明媚な土地柄であった。途中、総務省の視察に出会う。

【③塩釜市】

- ・ ここは港に続く遊覧船乗り場の道路が浸水する場面が、インターネットで流れていた地域。同じ道路を走ると何事もなかったようだが、結構交通量が多い道路にも関わ

らずまだ信号がついていない。道路わきの大型スーパーマーケットも閉店中だった。

【感想】

- 老人クラブの会長が、自分たちの地域の被害状況をいち早く知りたいと動いていることを知り、このようなことを全国にも発信していきたいという意を強くした。
- 若林区は広く続く平地で、4階建ての小学校が避難場所になるような地域。七ヶ浜町は、すぐそばに上がれる高台がある地域。今後の復興に向けて、ひとつひとつ地域に合わせた、違う対応が迫られていることを感じた。おそらく老人クラブの復興もそうだろうが、組織の力を生かして支援をしていきたい。



仙台市若林区荒浜
自宅の土台と松



砂浜で佐藤若林区会長の説明を聞く
(左から) 齊藤全老連事務局長、
市老連 梶原事務局長、橋本会長、
本郷副会長



七ヶ浜町の海岸近くの家
裏は高台